

ここが
すごい!

こんなにある岩内発の日本初・北海道初

岩内町郷土館には、岩内から生まれた北海道初・日本初の歴史を物語る貴重な資料が展示されています。1871(明治4)年に岩内で発見された野生ホップは、日本のビール産業の出発点となり、後のサッポロビールへとつながりました。下田喜久三博士によるアスパラガス栽培の成功は、日本のアスパラガス産業発祥の礎となりました。また、茅沼炭鉱鉄軌道で使用されたレールの一部も展示されており、日本の鉄道開業である新橋～横浜間(1872年)より早く敷設された、日本初の鉄軌道として紹介されています。さらに、1906(明治39)年に運転を開始した北海道初の水力発電所である岩内水力発電所に関する資料も見ることができます。これらの展示は、岩内が日本の近代産業や技術の発展に大きく貢献したことを今に伝えています。



ここが すごい! ニシン漁で栄えた 岩内町の歴史

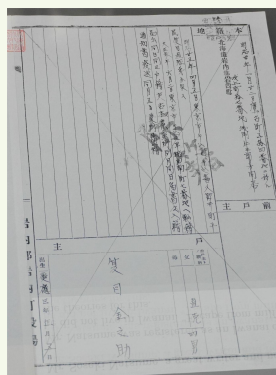
岩内は、江戸から明治にかけてニシン漁で大いに栄えました。展示されている漁具や資料からは、当時の漁の様子や人々の暮らしぶりを知ることができます。ニシンは食料としてだけでなく肥料としても利用され、地域の経済発展に貢献しました。その後の不漁によりニシン漁は衰退し、町の産業構造も変化しました。ニシン漁の盛衰は岩内の発展と地域社会の変化を知るうえで重要な出来事です。



ここが
すごい!

漱石は岩内町に 住んでいた?

夏目漱石は1892(明治25)年に本籍を東京から岩内町へ移しましたが、岩内町には住んでおらず、戸籍だけを22年間置いていました。その理由は、徴兵を避けるためという説が有力です。当時の北海道では徴兵令の適用が限られており、本籍を移すことで兵役を免れられる可能性がありました。漱石自身は理由を「妙な関係から」としか述べておらず、明確な記録は残っていないため、真相は分かっていません。



岩内の発展を支えた最大の産業はニシン漁でした。郷土館にはニシン建網漁の精巧な模型をはじめ、当時の漁具や加工道具などが展示されています。これらの資料からは、かつて「ニシン景気」と呼ばれるほどの繁栄をもたらした岩内の往時の姿をうかがうことができます。北海道日

さらには北海道のビール産業の発展につながった野生ホップの発見に関する展示などが並びます。なかでも1869(明治2)年に使用された日本最古の鉄製レールは、北海道の近代産業の黎明期を伝える貴重な文化財です。これらの展示からは、岩内が北海道開拓の最前線に位置し、新しい産業や技術の導入を牽引した地域であったことがわかります。

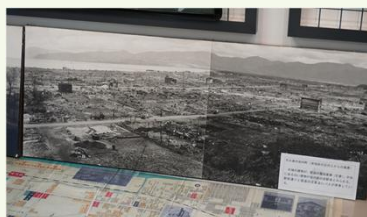
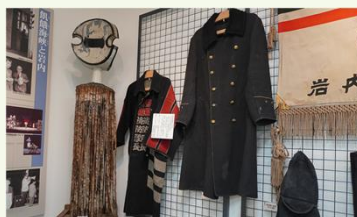
なかでも注目したいのは、岩内が北海道開拓の先進的な取り組みの舞台となっていたことを伝える展示です。館内には、北海道最古の炭鉱として知られる茅沼炭鉱に関する資料をはじめ、北海道最初の水力発電施設、日本におけるアスパラガス栽培発祥の地に関する展示、北海道で2番目に開設された馬車鉄道の資料、さらには北海道のビール産業の発展

岩内町郷土館は、1971(昭和46)年に町制施行70周年を記念して開館した郷土資料館です。北海道でも有数の歴史を持つ港町岩内の歩みを後世に伝える施設として、ニシン漁の繁栄を物語る資料や北海道開拓に関する貴重な展示を数多く収蔵しています。

ここが
すごい!

岩内大火と復興の歩み

1954（昭和29）年9月26日、台風第15号（洞爺丸台風）の影響で岩内町は記録的な暴風雨に見舞われました。市街地の一角から発生した火災は、最大瞬間風速30メートルを超える強風によって瞬刻に延焼。暴風のため消防活動も大きく制約され、火災は町全体へと拡大し、岩内町の町域の約8割が焼失する壊滅的な被害となりました。この災害は「戦後三大大火」の一つに数えられており、焼失家屋は3,298戸、被災者は16,662人にのぼり、35人が亡くなりました。被害総額は当時の金額で約100億円に達し、新聞などでは「再起不能」と報じられるほど深刻な被害でした。本展示では、岩内大火に関する写真や記録を通して、当時の状況と復興への歩みを振り返ります。



ここが
すごい!

飢餓海峡と岩内

水上勉の小説『飢餓海峡』は、1954年（昭和29）年に発生した「洞爺丸台風」と「岩内大火」という二つの大災害を背景にしています。この作品は1965（昭和40）年に内田吐夢監督、三國連太郎主演で映画化され、日本映画史に残る名作となりました。映画では、主人公が逃亡する場面が岩内町で撮影されています。郷土館では、この映画に関連する資料や写真パネルを展示しており、小説や映画に関する資料、撮影当時の写真などを通して、名作『飢餓海峡』と岩内町との関わりを紹介しています。



ここが
すごい!

ニシン場親方の華やかな生活

ニシン漁によって莫大な利益を得た親方たちは、高価な品々を手に入れることができました。その一例がオルガンです。当時のオルガンは非常に高価で、一般の人々には手の届かないものでしたが、ニシン場の親方はそれを購入して自宅に置き、音楽を楽しんでいました。また、絹地に総刺繍を施した屏風や薩摩焼の陶器なども残されており、これらの資料からはニシンマネーによる豊かな暮らしぶりをうかがうことができます。こうした高価な衣装や調度品は、親方の財力の大きさを示すだけでなく、高い社会的地位の象徴でもありました。ニシンマネーは親方たちの生活を華やかにしただけではありません。その豊かさは町全体の文化や生活水準の向上にもつながり、地域社会の発展を支える重要な力となっていました。



本海側の漁業史を学ぶ上でも大変貴重な展示です。

また、映像コーナーも見逃せません。昭和初期の岩内や札幌の街並み、岩内から札幌へ向かう国鉄沿線の風景、さらに1929（昭和4）年に小樽港沖へ集結した旧日本海軍連合艦隊の様子など、極めて貴重な映像が上映されています。戦前の北海道の暮らしや風景を動画で見ることができ、写真資料とは異なる臨場感で当時を体感できます。

文学・芸術分野の展示も充実しています。文豪・夏目漱石が岩内に戸籍を置いていたことを示す戸籍謄本をはじめ、有島武郎や木田金次郎に関する資料、水上勉の名作『飢餓海峡』の関連資料などが展示されています。特に『飢餓海峡』は1954（昭和29）年の岩内大火が作品誕生のきっかけの一つとされており、館内ではその歴史的な大火災に関する記録も見ることができます。

このように岩内町郷土館の魅力は、単なる地域史の紹介にとどまらず、北海道開拓の先進性や近代化の歩みを多角的に学べることにあります。規模は決して大きくありませんが、その内容は非常に充実しており、岩内が北海道史の中で果たした重要な役割を実感できる施設です。訪れれば、北海道開拓と日本の近代化を支えた岩内の歴史と魅力を深く知ることができましょう。



ニシンが運んだ巨万の富 ～ニシン漁親方の世界～

かつて北海道の日本海沿岸を沸かせたニシン漁。その中心にいた「親方」たちは、当時の日本でも指折りの圧倒的な富裕層でした。彼らは自らの富と権力を誇示するように、競って「鯨御殿」と呼ばれる大豪邸を建築し、その暮らしぶりは今なお語り継がれています。

それでは、彼らは一体どれほどの利益を上げていたのでしょうか？

岩内町郷土館の資料によると、代表的な親方の一人である濱喜三郎は、1863（文久3）年に29歳で岩内の地へ渡ってきました。当初は漁業のほか、雑貨や荒物の販売、冬季には豆腐の製造など多角的な経営を行っていましたが、1885（明治18）年に商業を廃業。すべてのエネルギーを漁業へと注ぎ込みます。その結果、最終的には網を仕掛ける場所（建網漁場）を10箇所も所有する大親方へと上り詰めました。

当時のニシン漁は、豊漁ともなれば1箇所あたり現在のお金にして約3億円もの利益をもたらしたといわれています。

つまり、10箇所の漁場を持つ喜三郎は、わずか3ヶ月ほどの漁期の間に、単純計算で約30億円という巨万の富を手にしていたのです。喜三郎はこの豊富な資金を元手に、のちに酒造業へも進出しました。

「やまきの殿様」と称された喜三郎の私生活は、まさに規格外でした。常に白馬にまたがって移動し、晩年に東京へ治療に赴いた際には、数十羽の小鳥を購入。今で言うグリーン車に相当する客車を一両丸ごと貸し切り、車内に小鳥を放し飼いにした状態で岩内まで連れ帰ったという逸話が残されています。

しかし、彼は単なる浪費家ではありませんでした。得た富を地域へ還元すべく、橋梁の架設や、学校・郡役所の新築費用としての巨額の献金、さらには道路用地の提供など、多大な社会貢献活動にも尽力しました。

現在も資料館に残る贅を尽くした品々は、こうした親方たちの圧倒的な経済力と、北海道の近代化を支えた光と影の歴史を今に伝えています。



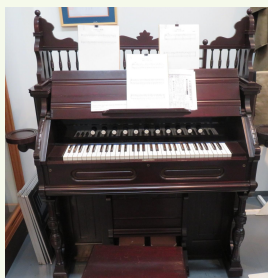
親方衆の羽織。裏地には西陣織が使われています。



輪島塗丸火鉢と七枚重盃。組盃は主に「三ツ重」、多くても「五枚重」ですが七枚重は珍しいものです。



濱喜三郎（1834（天保5）年～1898（明治31）年）

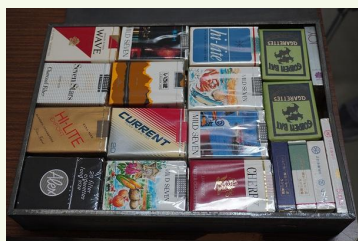


国産最古1905（明治38）年製のリードオルガン。



1897（明治30）年頃に買い揃えられたお雛様。食器は漆塗り、模様は手書きで繊細です。

1976（昭和51）年のチラシ



1975（昭和50）年のチラシ



これらの資料は、人々の暮らしや消費文化、地域経済を伝える貴重な記録です。まさに「昭和の岩内町を切り取った記録」といえるでしょう。

井上コレクションは、岩内町の歴史やまちの移り変わりを伝える文化資産となつていきます。展示される機会がありましたら、足を運んでみてはいかがでしょうか。

岩内町郷土館では、さまざまな企画展を開催しています。長年大切に保管されてきた資料や新たに発見された資料が展示されており、地域の歴史や歩みを楽しく知ることが出来ます。

企画展たびたび紹介されるのが、寄贈者の名前にちなむ「井上コレクション」です。主な資料は昭和49年から平成2年頃にかけての新聞折込チラシで、地元商店の特売情報や新装開店



新聞折込

チラシでたどる昭和の暮らし

の広告、催し物の告知などが数多く残されています。当時の物価や流行、商店街のにぎわいを知ることができ、展示を通して昭和の岩内町の雰囲気を感じることが出来ます。

さらに、当時販売されていた未開封のたばこや、町内の飲食店で使用されていたマツチ、公共施設の落成記念パンフレットなど、多彩な資料も保存されています。



えっ、あのスターが？ 収蔵庫の驚き

郷土館の収蔵庫は、昔の暮らしや出来事を未来へ伝えるための「お宝の保管庫」です。普段はなかなか入れない場所ですが、岩内町郷土館ではその一部を見学できます。

中でも目を引くのが、1978（昭和53）年の山口百恵オンステージのポスターです。当時のトップスターが岩内中央小学校の体育館で公演を行っていたというから驚きです。こうしたポスターやチラシは、役目を終えると捨てられてしまうことも多く、今では残っているだけでも貴重な資料です。一枚のポスターから、その時代の熱気や人々の楽しみ、にぎわいが伝わってきます。

収蔵庫には、こうした資料をはじめ、岩内の暮らしや文化を物語る品々が数多く保管されています。思いがけない発見があるかもしれませんので、ぜひ岩内の歴史に触れてみてください。



i INFORMATION

- 住所 岩内郡岩内町字清住5-3
- 電話 0135-62-8020
- 開館期間 4月上旬～11月下旬
(12月～翌3月は冬季休館)
- 開館時間 9:00～17:00
- 休館日 毎週月曜日
(但し、月曜が祝日の場合は翌日が休館日)
- 観覧料
 - ・一般（岩内町に住所を有する者）
個人100円 団体70円
 - ・一般（上記以外の者）
個人300円 団体250円
 - ・高校生以下
無料
 - ・観覧料は、1人につき1日です。
 - ・10名以上は団体料金となります。
- HP <http://www.iwanaikyoudokan.com/>

